

詩人の魂と社会学

——松島浄先生を送る

水谷史男

気がつけば自分もいつの間にか齢を重ね、もうじき還暦である。

歳を重ねてくると、年長の先輩に対しても物怖じすることなく、というよりも抑えていた傲慢を隠すことなく、軽口や批判めいた言辞を吐くことが平気でできるようになる。それは自分が人として成長したのではなく、たんに自分の恥知らずな尊大さを抑制する謙虚な緊張が薄れてしまうからである。うら若い人を見ても、もはや羨望の情感も喚び起こさず、ただ愚かで未熟なだけの存在に見えてしまう。われながら少々情けない。要するに自分が性格の悪い頑迷なジジイになってしまっているということだ。それに引き換え松島浄先生は、なんと世俗の醜悪な老いから免れて、いつも変らぬピュアな心をお持ちなのだろう、と思う。

この文章は、長年この明治学院の社会学部でお付き合いいただいた松島浄先生をお送りする言葉としては、少々失礼な文章になるかもしれないが、できればふふんと笑ってお許しいただきたい。

われわれの世代までは、文学というものが、とくに私小説や叙情的な詩を一〇代の頃に熱中して読む経験をもつた人は少なくないが、大半は大人になり就職すると文学熱は醒め、いい歳でいつまでもそんなものを読んでいる

ものではない、と離れていく。たとえば今年は太宰治の生誕百周年だそうで、六〇年も昔にこの世を去った作家の作品は今もまだ一部の若者にも読まれているようだが、太宰の「文学」にのめりこむ若者は、また短期でインフルエンザから立ち直るような軽薄さで離れてゆくのが普通である。太宰治に限らないが、近代文学としては特殊な「私小説」の伝統に立つ日本の小説は、散文でありながら結局は叙情詩みたいな世界を描くことに力を入れる。

私の仄間に過ぎないが、北九州ご出身の松島浄先生は、明治学院の文学部社会学科の時代にこの白金で学生時代を送られ、当時明学にいらした社会学の泰斗、東北大学を退官された新明正道先生が赴任された明治学院から数年で中央大学に移られたのを慕って、中央大学の大学院に行かれた由である。私の記憶は曖昧なのだが、その新明先生が松島先生について触れられた短い文章の中に、松島浄を評されて「詩人的な人」と書かれていたと思う。社会学は論理と経験でこの世の現実を緻密に言語化する「散文的」世界であると考えられるから、見方によってはこの言葉は、否定的なニュアンスを含むように私には思われた。しかしまた、「詩人的」な人が社会学を専攻し、しかも「文学の社会学」を構想されていることになにか不思議な魅力も感じたのである。

やがてさまざまな機会に松島先生のお話をうかがい、いくつか調査などでも一緒にすることになった。そのつど先生の資質がまさに「詩人的」であることを実感し、私自身がひどく「散文的」な人間であることを思い知った。ただし、松島先生の中には独特の社会認識、詩的な精神を論理で探究するような指向があるのかもしれないとある時思ったのである。それは、たとえば次の太宰治について書かれた吉本隆明の文章がヒントになるかもしれない。ちよつと長い引用してみよう。

「太宰治の理解の仕方というのは「駆込み訴へ」という作品によくあらわれています。それはユダの立場からキリストを視るといふ取り上げ方をしています。どいう理解になっているかといいますと、ユダの方から視ると、キリスト、つまり福音書の主人公は、お坊ちゃんで、世間知らずで、わがままで、なにもわかっていない。たとえば福音書の中に、群集にパンを与えるというようなところがあるわけですが、その場合に、群衆が大勢いるのにパンが少ししかない。しかし、これを分け与えようとすると、パンはたちどころに殖えて、すべての群集にゆきわたって、なおかつたくさん余るといふ奇蹟が成就されます。こいう奇蹟に対する太宰治の理解の仕方は、ユダの側からの理解の仕方です。ユダが、おれが精一杯、方々からパンをかき集めてもってやってただけでも、主人は一向そんなことは平気で、無茶苦茶なことをいって、勝手な奇蹟行為をやる。そしてその奇蹟行為の陰にはいまでもなく、現実的にユダが方々から金をかき集めてきたり、パンをかき集めてもってきたりという現実的なカラクリがあった。奇蹟は縁の下でじぶんがみんな演出したんだ。だけど、うちの主人は一向そんなことは意に介さないで、まったく世間知らずの勝手なことばかりいっている。しかしこの主人は憎めない主人で、やっばりおれがいなけりや、勝手なことでもないし、また勝手なこともやれない。もちろん奇蹟など成就できない。キリストの奇蹟の陰にはみんなおれが現実的に、一生懸命駆けまわってその材料をとり揃えて、そのあげく奇蹟を成就したということ、つまり陰になっていつも縁の下の力持ちをやったのはおれだった。しかしおれに對してすこしも目を向けるということはない。そして勝手なことばかりいっている。」（吉本隆明「新約的世界の倫理について」『吉本隆明全著作集14』勁草書房、一九七二年、三六二〜三六三頁。原文は一九六八年フェリス女学院大学での講演記録）

詩人吉本隆明は、私の世代が若いころは一種のカリスマで、講演会などは会場に入れないほど大盛況になり、私も会場の外の階段に座って話を聞いた覚えがある。彼の「マチウ書試論」という新約聖書を題材にした文章は、まさに強烈な詩のように心に響く気がした。しかしそれゆえに、熱狂は長く続かず、社会学という地味で無味乾燥な「散文的」世界に深入りするとともに、太宰、小林秀雄、吉本という「詩人的」でえいやつと気力で物を言う世界が、ひどく美しいが何かあやしい世界に見えてきたのである。それは次の江藤淳との対談の文章を読んだとき、なるほどと納得するものがあった。

「ただ、吉本さんがそういうもの（岡潔と小林秀雄の対談における「達人的な職人芸」と吉本がみなすもの。筆者注）に対して批判をもっておられるのはわかるが、吉本さんの資質の中にも、非常に詩人的・達人的なものがあると思います。それが小林秀雄に似ているか、中原中也に似ているかわからないが、とにかく吉本さんの中で詩的絶対性のようなものを求める気持ちは、とても強いと思うのです。吉本さんの詩には、これがとても美しい形で出てくる。ところが吉本さんは、さっきおっしゃったようにぶつつかるものが多いでしょう。そうすると、あなたはぶつつかった相手を見る前に、自分がぶつつかった感触から出てくる情緒というか、情念を見る。そういう形で、個性的な反応をされる。僕はたいてい愛読していますし、共感できる場合が多いのだけれども、ただその発想が、散文的な論争文などの場合でも、すぐれて詩的だという感じがするのですね。」（『文学と思想』〈雑誌『文芸』一九六六年一月号での吉本隆明・江藤淳の対談における江藤の発言部分〉、同書、四二二頁）。

それからいぶん長い時間が経ってしまった。ほくは江藤淳を手がかりに、「詩人の職人芸」とは決別しようと吉本とは離れて、愚にもつかないと思われた実証主義社会学の方へUターンしてしまった。でも、松島先生は詩

人の魂を持ち続けながら、文学、少女マンガ、歌謡の世界と社会学を結びつけようとされていたと思う。それは必然的にアートに接近する。吉本には『言語にとつて美とはなにか』という著作があるが、ここでは言語のロゴスや構造ではなく、非日常的な原初の記憶の表現としての詩が、人に何かを覚醒させるものだけが問題だと言っているような気がする。もし松島先生もそういうものを核心に、人間の社会を考えておられるのなら、必然的に言語表現からさらに発展して、そこを超越した身体とヴィジュアルな表現、つまりヨガと水彩画に接近するのは自然のなりゆきであつたかもしれない。

数年前、社会学部の趣味で絵を描く教員三名で、ささやかな絵画展を開催した。松島先生が五〇代を過ぎてから絵画の世界に入られて、たくさん水彩画を描かれていることを知った私は、もうひとりの日本画を描かれる社会福祉学科の遠藤先生をお誘いして、白金高輪のギャラリーで三人の絵画展を企画したのである。そこで見た松島先生の絵は、印象派以降の実に正統的な近代絵画の王道をわきまえた素人離れた作品であつた。近代西洋の絵画芸術は、宗教や歴史や政治のくびきを脱却して、何かの道具としての表現からアートそれ自身の欲求から発露する作品自体の価値に意味を見出して発展してきた。固有の作品としての絵は、主題や素材や主義主張のよくな何か別のものを表現しているのではなく、一枚の絵そのものが存在としての自己を主張している、という方向である。松島先生の描かれる絵は、確かにそういう表現になつていくという印象を私はもつた。

私も絵を描くので、松島先生の絵がとて爽やかな美を表現されていることはよく理解できる。しかし、私自身的美術に対する態度は、近代絵画をもう一度ひっくり返したいと無謀な試みを密かに企てているので、壁にかけて心地よい絵画を否定したい気持ちがある。「散文的」で数量的な社会学を自分の仕事として選んだ以上、私は

「詩人的」な世界には戻れないのである。いずれにしても我々は職業的な画家ではないので、何をどう描こうが自由なのだが、松島先生が詩人の魂を一貫して持ち続けておられることに深い尊敬の念を抱いている。

いろいろ勝手なことを述べてきたが、松島先生がずっと取り組んでこられた沖繩の文学表現の研究についても触れなければならないと思いつつ、それは私の言及できることではないので、控えることにする。沖繩の研究は私も手がけているが、松島先生とは方法も視点もあまりに異なっているからだ。最後に、明治学院大学社会学部にとって、松島浄先生は実に貴重な存在、ユニークな先生であり続けられたと改めて思う。先生は多くの学生たちにとっても、忘れがたい印象を残された。私がここで教えを受けた先生は、松島先生をお見送りすることで最後となる。

先の絵画展開催の際、会場に絵を運び壁に並べたとき、松島先生の最愛の奥様がご一緒にいらっしやうって手伝われた。絵を眺めて嬉しそうにされていた奥さまは数年も経たずお亡くなりになった。詩人の魂にとって、それが深い喪失であったことが想像される。美しいものは誰にとっても生きる喜びを与えてくれるが、人間の生命には限りがある。「散文的」精神にとつては、死もまた平凡な出来事のひとつでしかないが、「詩人的」靈性にとつては美は永遠につながる。

松島先生、どうかこれからもお元気で、絵を描いてください。